

入院直後に確認しておくこと

- ☐ 病気の事
- ☐ 入院治療の期間
- ☐ 子どもの状況をどの程度クラスメイトに伝えるか
- ☐ 転校の有無
- ☐ 学校でしてもらいたいこと

入院中、子どもが喜んでしたこと

- ＊担任の先生が病院にお見舞いに来て、子どもと何気ないおしゃべりをしてくれたこと
- ＊担任の先生が、クラスメイトからの手紙を持ってきてくれたこと
- ＊電子メールで学校の様子を教えてくれたこと
- ＊養護教諭が、手紙で保健便りや遠足の様子を教えてくれたこと
- ＊クラスに子どもの机をそのまま残しておいてくれたこと
- ＊クラスの委員をそのままにしてくれたこと
- ＊教科書について：他県に入院した時は違う教科書だが、進級した時等、保護者が希望した場合、同じ教科書を用意してくれたこと（実費になる）。
- ＊テレビ電話等で教室と病室をつないで、クラスメイトの顔をみて話が出来たこと
- ＊院内学級で描いた絵や習字を教室に貼ってくれたこと
- ＊学級便りやテストを送ってくれたこと
- ＊進級しても、学級通信に名前をいれてくれたこと

退院カンファレンスの時に話し合う内容

- 1) 子どもの病気の事
 - ☐ 今後の治療（外来受診時の遅刻・早退を含む）
 - ☐ 薬の副作用（脱毛、皮膚の症状）
- 2) 学校生活上の留意点
 - ☐ ならし登校の方法
 - ☐ 体育（マラソン・水泳）や運動制限
 - ☐ 行事（遠足・修学旅行）への参加
 - ☐ 部活への参加
 - ☐ 感染予防（マスク、手洗い）
 - ☐ 感染時の対応（クラスに欠席者が何人いたら欠席にするかなどを具体的にきめておきましょう）
 - ☐ 掃除のこと（ほこりをさける）
 - ☐ 動物との接触について
 - ☐ 紫外線対策（長袖・帽子）
 - ☐ 給食のこと（生もの）と食事制限
- 3) クラスメイトへの説明の仕方（子どもや保護者の気持ち）
- 4) 保護者への連絡方法

学校でできる感染予防対策

- ☐ 掃除当番はほこりが立たない係を本人に選んでもらいましょう。
- ☐ 手洗いは、液体せっけん等にして、手洗いが簡単にできるようにしましょう。
（メリット） 手洗いが確実にできるようになり、感染予防につながります。
- ☐ 教室の入口に、液体消毒薬を配置して、クラス全体で使う習慣をつけましょう。
（アドバース） 消毒薬の刺激が強く、手にしみて、痛いという子どももいるため、刺激がないものを使いましょう。
（メリット） クラス全員の健康管理にもつながり、一石二鳥！
- ☐ トイレをきれいに保つようにしましょう。
（メリット） 嘔吐や下痢の症状が出る感染症の二次感染を防げます。
例） トイレ専用のスリッパを用意する
- ☐ 復学してきた子どものためだけでなく、全員の子どもが自分自身を感染から守るために必要なことと理解してもらい、学校全体で感染予防対策を行いましょう。
例） ●クラスに一人でもインフルエンザが出たら、復学してきた子どもが休んでいても、クラス全員でマスクをして、感染を拡大させないようにする。
 ●休み時間は、窓を開けて、空気の入替えをする。
 ●手洗い・うがいの大切さを伝える。



病気の子どもの理解と支援のために —

復学支援サイト **【スクリエ】**
 — school reentry —



小児がんの子どもの復学を支援するためのホームページです。白血病で入院した子どもが入院治療し復学するまでを描いた絵本「おかえり！ めいちゃん」や、入院した時から退院後の学校生活の中で、学校の先生方やクラスメイトにお願いしたいことをまとめたパンフレット（学校の先生用、児童生徒）を紹介しています。また、復学支援に関する情報提供や相談窓口もあります。

<https://school-reentry.com>

がんの子どもの復学支援のためのパンフレット **教職員用**

作 大見サキエ・森口清美
 がんの子どもの復学支援プロジェクトチーム
 岐阜聖徳学園大学
 〒501-6194 岐阜市柳津町高桑西1丁目1番地
 TEL: 058-279-6228（研究室直通）

Illustration: Kunio Mori, Design: Shihoka Mori

子どもが入院した時、退院する時に学校の先生にお願いしたいこと



このパンフレットを使用する時のお願い

このパンフレットに記載されている内容は、復学支援を行った医療者、学校の教員、保護者の声を参考に作成しています。復学する子どもによって状況は異なるため、保護者と子どものご希望を聞いて相談しながら支援を実施してください。

復学支援のためのパンフレット **教職員用**

はじめに

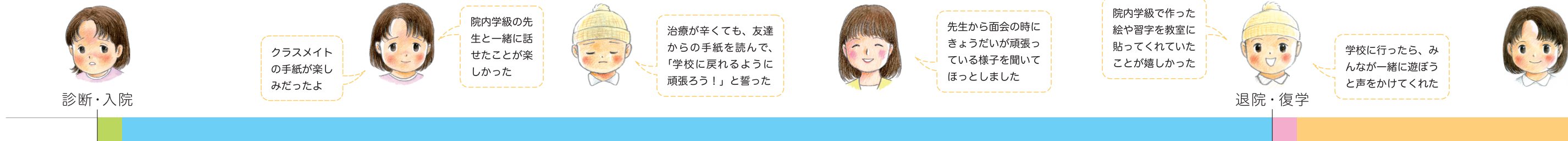
がんの子どもは、長期入院を余儀なくされ過酷な闘病生活を強いられます。

そこでは、これまで経験したことがない痛みや苦悩を抱えることになり、子どもは自信を喪失していきます。そのような中でも、元いた学校に戻って、クラスメイトとともに学ぶことは、子ども達にとっては最も大きな希望の一つです。

1週間程度の入院でさえ、子どもは様々な不安を抱えると言われています。中でも、小児がんは長期の入院治療が必要なことや、“死んでしまう病気”という間違ったイメージにより、子どもの力だけでは解決できない問題が起きることが多くあります。

このパンフレットでは、小児がんの子どもとその保護者の声をもとに、入院した時から退院後の学校生活の中で、学校の先生方にお願いしたいことを紹介しています。

戸惑われることもあるかと思いますが、小児がんの子どもと保護者、そしてクラスメイトの気持ちを大切に、学校全体でサポートして頂けることを願っています。



I 入院した時

病状を正しく理解しましょう

1) 病気について正しく理解するために、情報収集をしましょう

一般に小児がんは「治る見込みがなく死ぬ病気」という認識をお持ちの方が多いですが、現在の治癒率は7～8割と高くなり、ほとんどの子どもが治療を終え、学校に戻ることが出来ます。誤った情報が広がり、子どもや家族が悲しい思いをしないように、先生方は、病状を正しく理解することが大切です。

アドバース 治療が始まったら、出来るだけ保護者とともに医療者から病状の説明を受けましょう。学校関係者を交えた入院時のカンファレンスを実施する病院がありますので、保護者に予定を確認して出来るだけ参加しましょう。

2) 医療者に問い合わせ、確認しておくことが大切です

入院時から、復学支援は始まっています。学校全体で子どもを迎える準備を始める方法やアイデアを受け持ち看護師に尋ねることは、病状を正しく理解し、子どもを受け入れるために重要です。医療者と協力して一緒に考えることで、先生方の不安が軽減されます。また、保護者を交えて医療者と今後の入院生活について話をする機会を持つことも良いですね。そして、ぜひ医療者に入院する前の子どもの様子を伝えてください。

医療者の声：希望があれば、説明を嫌がる医療者はいません。医療者も学校との連携を強く望んでいます。医療者も入院する前の子どもの様子を知りたいです。

II 入院中

1. 子どもとのつながりを続けましょう

1) 入院した子どもと学校のつながりが途切れないようにしましょう

先生方をお願いしたいこと：転籍後も子どもの顔を見に行き(面会)、子どもとのつながりを継続しましょう。

2) クラスメイトに対して、子ども・保護者が望まれる情報を正しく伝えるようにしましょう

子ども・保護者と相談して、クラスメイトに病気についてどのように話すのか、しっかり話し合っておきましょう。クラスメイト以外の子ども達にもどのように説明するのか、学校で統一しておくことも大切です。

2. 家族支援を行いましょう(保護者・きょうだい)

1) まず、保護者の話をしっかり聞きましょう

保護者の声：病院に付き添いながら病気の子どもを看病している時、不安な気持ちを担任や養護教諭に聞いてもらっただけで、楽になった。分かってもらっているという気持ちになった。

アドバース なかなか言い出せない保護者もいますので、「がん」だからと怖がらないで(逃げないで)、声を掛けてください。そして話を聴いてあげてください。

2) きょうだいのことも配慮しましょう

保護者の声：どうしても入院している子どもにばかり目がいてしまい、きょうだいに寂しい思いや辛い思いをさせました。先生から面会の時にきょうだいが頑張っている様子を聞いて、ほっとしました。きょうだいにも学校で「がんばっているね」と声を掛けていただき、感謝しています。

3. 院内学級の先生と連絡を取り合いましょう

院内学級に転籍しても、子どもは「自分の本当の学校は地元の学校」という思いを強く持っています。転籍後も院内学級の先生と連絡を取り合い、日頃から信頼関係を築くことが大切です。子どもの面会に行った時には、入院前の学校の様子を伝えたり、院内学級の様子を尋ねたりすることで、入院中だけでなく、復学後の適切な学習支援が可能となります。

4. 退院が決まったら、退院前に保護者・医療者・学校関係者との会議に参加しましょう(場合によっては本人も出席)

アドバース 学校で作った個別支援計画を医師に見てもらうことで、復学を迎える体制へのヒントが得られるかもしれません。事前に、子どもの体力を保護者から情報収集しておく子どもの状況に沿った指導計画が立てられます。(保護者の許可を得て、直接医療者に体力の情報を得る方法もあります。)子どもは退院前に下半身の筋力を鍛える等のリハビリを行い、学校に通学できる体力増強を目指しています。理学療法士からの情報も役に立ちます。

5. 学校で子どもを迎え入れる準備をしましょう

教員 ★学校内の教員間の連携が良いと復学がスムーズにいきます。

1) 学校内で共通理解をしましょう

- 入院前後で外見に変化がある時の配慮事項を決めましょう。
- 守秘するべき情報と公開する情報を明確にして、情報の取り扱いに注意しましょう。
- 公開する時の方法と説明内容を明確にしましょう。
- これらは本人と保護者の意見を聞いて、同意した情報、方法のみにしましょう。

例) 保護者からの情報を基に、随時、入院中の子どもの頑張りの様子や治療経過を職員会議で報告し共通理解することで、病気と闘っている子どもを応援する体制を学校全体で作る。

2) 感染予防体制を作りましょう

学校全体で、感染症にかからない体制を作り、感染症に罹患している子どもの人数を把握し、保護者に伝えましょう。

例) 学校全体で健康観察を実施する時間を早めて、一人でも感染者がいたら、教室から職員室に電話連絡をする。職員室に養護教諭(もしくは他の教員)が待機して、電話を待つ。感染者がいた場合、登校時間を遅らせて家で待っている子どもに連絡して、欠席の判断を保護者にしてもらう。

※リット 欠席者がいる場合、学校に行ってもすぐ帰らなければならないことが多いですが、事前に連絡することで、体力消耗を防ぐことが出来ます。

3) 施設面での支援をしましょう

- 例)**
- 洋式トイレの設置
体力がなく、足腰の筋肉量も落ちているため、しゃがむことがきついため、洋式トイレを準備して、手すりも配置する。
 - 1階もしくは低層階への教室変更が必要かどうかを本人・家族と相談しましょう(本人が大事)

6. クラスメイトの受け入れ体制づくりをしましょう

1) クラスメイトに対して、子どものことを事前に説明しましょう。

アドバース 説明する前に、子どもと保護者にクラスメイトに対して伝えたいことを尋ねて下さい。適宜、児童用のパンフレットを活用しましょう。

クラスメイトに伝えたい内容の例：

- 子どもがクラスメイトと勉強するのを楽しみにしていること
- 外見の変化
例) 脱毛について、決してからかったりしないこと、時間はかかるが、髪の毛は生えてくること
- 外来受診があるため、授業に遅刻や早退することがあること
- 感染予防のために、マスクをしていること
- 学校、クラスに感染者が出たら、感染予防のために欠席することがある
- 特別扱いしてほしいと思っていないこと。出来ないことがあった時だけ手伝ってあげましょう。みんなと同じように、すごしたいと思っていること
- 入院や治療はとてつらいのに、頑張ってきたよ。だから、とても我慢強いよ。
- 体力低下があり、クラスメイトとすべてのことを同じように行うことが難しいこと(体育の見学、掃除の時に重たいものが持てない、車での送迎など)退院後間もなく疲れやすいので、カバンをもってあげたりして手伝いながらみんなで応援しましょう。

III 復学直後

子どもの登校初日に気を付けること

- 初日はとても緊張しています。クラスの中に自然と入れるような企画があると良いと思います

例) 入院前に仲良しだった子どもを同じクラスに配置する。仲良しだった子どもの近くに席を用意する。

- 外見に関することは、本人・保護者に相談しながら、説明しましょう(特に髪の毛、帽子、バンダナ、かつらなど)

IV 復学後

1. 徐々に通学できるように配慮しましょう

初めから全ての授業には出席できません。短時間の出席から始めると体力の消耗を最小限にできます。

- 例)**
- 朝早いのはきついため、2時間目の1時間から始める。次に、2・3時間目、そして1～3時間目と徐々に時間数を増やす。
 - 子どもは早くクラスメイトと同じようにやりたがる傾向があります。無理をしないか毎日の子どもの様子を観察し、徐々に体が慣れるように活動範囲を調整してあげましょう。
 - 学校では元気にふるまい、クラスメイトと同じように活動していたため、先生もすっかり体力が戻ったと判断してしまった。しかし、本当は先生に言い出せずに辛くて泣いていた。毎日、帰宅すると玄関で倒れこみ、夕飯も食べずに寝てしまうことがあった。

こんなことのないように復学した数週間は、保護者とこまめに連絡を取り合い、無理をさせないようにしましょう。また、子どもが頑張ったときなどの様子を保護者に伝え、家庭での様子も尋ねましょう。

※リット 家であまり話さない思春期の子どもが、家で元気がない時など、保護者にとって、元気がない理由が分かるとほっとする。子どもがしんどそうな様子を見るのは辛いので、学校での様子が分かると安心する。

2. 子どもに自信を取り戻すあらゆる工夫をしましょう

クラスでの委員会や役割分担については、クラスメイトの一員であることが感じられるように、できるだけ参加できるようにする。これはクラスメイトとしての一体感を醸成します。

例) 掃除など、自分ができることを本人に決めてもらい、参加している実感を持たせる。

3. クラスメイト以外の子ども達や他の保護者の理解を促しましょう

クラスメイト以外の子ども達や保護者の理解があることで、復学後、子どもやきょうだいへの支援につながります。子どものきょうだいのクラスメイトや保護者が子どものことについて心配して、病気や欠席について尋ねることがあります。保護者と子どもの意見を聞いて、病気と配慮について説明をしましょう。

4. 保護者の許可をいただき、教員が直接病院に問い合わせることが出来るような体制をつくりましょう

例) 外来受診に同行する。学校行事前に気を付けること等を、電話で問い合わせる。

5. 定期的に情報共有をしましょう

遠慮して必要なことを伝えられない保護者もいます。受診後など折をみて、定期的に情報共有をしましょう。

